**№42　テーマ『人間としてプロとして本物とは何か』**

**講話日2016年11月4日**

**みなさんこんにちは。今日は秋らしい良い天気になって良かったです。陽射しが出るとやっぱりあったかいですね。昨日東京だったんですけど、ちょっと寒かったですけど、今日は陽射しがあるのであったかいですね。秋というのはいろんな意味で、文化の秋とかスポーツの秋とか、いろんなことが言われますけど、人間の活動においてはあまり寒くもない暑くもない良い気候ですよね。**

**今日の私の話は、人間としてプロとして本物とは何かという、本物論と言われる問題をお話をさせてもらいたいと思っています。そもそも人間に本物とか偽物とかあるんか、という問題もあるんですよね。特に今日は個性の時代と言われていて、こういう人間じゃないといかんという形苦しい、窮屈な枠にはめるようなことは言うたらいかん、というのが今日の個性の時代の常識という風に考えられているということもあります。**

**それにもかかわらず、人間というものには本物という、そういう風にいうことができる人物と、こいつは偽物だと言える人間の違いがあると考えなければならないっていう根拠は一体なんなのか、というところからお話を始めたいと思います。**

**個性というのはもちろん大事なもので、それはそれでいいんですけど、にもかかわらず、やっぱり人間としてこいつは偽物やと言える根拠はなんなのか、この人は本物だと言える根拠は何なのか、というそこのところから話を始めたいと思います。**

**人間というものには他の動植物とは違う、人間という独特の命の形があるわけですね。犬猫ではない動植物ではない、人間という独特の命の形を持った存在というのが人間というものをまず表現する大事な現象であります。命の形というのは一体何を意味するのかってことなんですけど、形というのは内容の表現であるという考え方が哲学にはあります。もうちょっと難しく言うと「形式は内容の表現である」という言い方をするんですけども、これはその機械の形というのは、その機械の中にどういう機能、どういうはたらき、内容がその中にあるかによって、その機械の形が決まるということになってくるので、その新しい機能がその機械に付け加われば、その機能を表現してまた形が作られてくるので、形は変わるわけですね。また従来あった機能がその機械からなくなれば、それを表現した形の違いが出てきます。そういう風に考えると、人間という命の形っていうのは、その中にどういう内容が含まれているのかということを表現するものなんだ、人間は何でこういう命の形になったのか、それは人間独特の内容というものがあって、他の動植物にない独特の内容というものがあって人間という形ができているんだと考えなければならない。**

**これが形は内容の表現であるという事なんですね。そういうことから考えると、人間という命の形にふさわしくない内容を持っていたのならば、これは人の顔をした獣って言われる、人でなし、人間ではないと言われるわけであります。であるが故に我々は人間という命の形というものが、いかなる内容を表現しているものなのか、人間という命の形になければならない内容とはなんなのか、ということを問い詰めて行くことによって我々は人間としての本当のあり方、人間としての本物のあり方というものを知ることができます。そして命の形にふさわしくないものを持っていれば、人間として偽物、人でなしというふうに言ってしまえる、そういうことになってくるわけですね。**

**まず人間には本物と偽物がある…我々は仕事をする上でもプロとして本物という、そういう力を養っていかなければなりません。プロとしてどういう力、どういう内容が要求されるのか。仕事をする上で自分の努力の目標として考えていかなければならない課題ではないかと思います。プロというのはアマチュアと違って金を取って仕事をするという社会的な関係性がありますから、堂々と金が取れる力というものを作っていかないとプロとして本物とは言えません。プロとして本物の力というのはどういうことなのかと言ったら、お客さんから「さすがプロですね」と言われてこそプロ。さすがと言わせて初めてプロだと。それが素人との違いということですね。さすがと言われないような半端な力で金を取ろうなんておこがましいと言って、恥ずかしいと思わなきゃならない。全てのプロは金を取る限りは、さすがと言わせなきゃならない。そういう目標というか、そういう成長目標というものをしっかりと心に秘めておくことが大事なことだと思います。**

**では、さすがと言われるものが一体どういう内容になるのかということをこれから考えていくことになるわけですね。**

**レジメに書いてあるように第三番目に「人間になるとはどうなることなのか」という、そういう問題があります。我々はみんな自分のことを人間だと思っているんですけど、だけども人間であるって言うことはどうあることなのか、人間になるって事はどうなることなのかという、そういうもう少し厳密な問いかけというものをあまり日常は持ちません。なんとなく人間の形をしているのだから人間だという思いで終わってしまってるんですけども、それでは人間として本物というものを目指していく目標が見つかりません。なんとなく生きてればそれでいいじゃん、とそういう感じで、ただその時の自分の思いで仕事をしているだけであって、具体的な目標がないと人間は成長しません。人間になるとはどうなることなのか、そこをしっかりしながら我々は仕事をし、生活をし、生きているという事が大事であります。**

**目標というものがないと、今何していいかわからないとなってしまって、結局目の前の問題に振り回されて、明確なぶれない生き方っていうのはできない。目標があることによってぶれない、何があっても動揺しない、そういう生き方ができるわけであります。経営の計画においても、今年はこういう目標を実現するためにみんなで頑張ろう、そういう目標があって初めてそのために今何をするかが決まってくる。それが目標・理想の価値であります。人間がいろんなことをする場合に、目標や理想、夢があって、初めてぶれない本当の成長をし続けるんです。自分自身で自分の成長を確認できるような生き方ができるようになるのではないかという風に思われます。**

**そこで人間になるとはどうなることなのかということを考えていくと、まず一体人間というのはどういう風にして生まれ出てきたものなのかという生命の歴史というものを考えていかないと、具体的に誰もが納得できる答えというものを作り出すことができません。一般的には人類史400万年と言われておりまして、約400万年ぐらい前から人類は猿類から独立して、人類としての歩みを始めたという風に言われておるわけであります。人類史400万年と言われますけども、その中の380万年という時期は、まだまだ人類は動物学上の分類における人類と認識されておりまして、他の動物と同次元で生存競争をしながら、食うか食われるかという生き方をしておった時代という風に言うことができます。だけども人間が「俺たちは他の動物と同じ次元ではない、俺達は人間なんだ」という意識、自覚を持って人間が生き始めたのが今から20万年ぐらい前からだという風に言われておるわけであります。では20万年前に何があったのかということなんですよね。その証明として人類考古学、あるいは文化人類学と言われる学問の研究でわかってきたことは、今から20万年より古い地層から出てくる人骨には、宗教的儀式をして葬った痕跡がない。だけども、今から20万年から今日に至る地層から出てくる人骨には、宗教的儀式をして葬ったと思われる痕跡がある…これが20万年より昔と、20万年から今日までというものを明確に区別する人類史的根拠、事実と考えられておるわけであります。**

**では宗教的儀式をして死者を葬るとはどういうことなのかと言うと、宗教的儀式をして死者を葬ることをするためには、そこに宗教というものがなければならない。人類が最初に作った文化というのは、原始宗教であると言われてるわけですね。ではなんで猿類から人類が独立して、そして単なる動物、人類という、単なる動物学上の分類における人類として生きている段階から、人間というより高次元な生き方ができるという状態に人間が進化するためには何が必要だったのか、何が起こったのか、何がそこにあったのか、ということを考えていかないと人間として生きる出発点というものを我々は知ることができません。そのためにまず人間が最初に作った文化は原始宗教だ、と言われていることを思い出さなければならないわけですね。ではそれはいつ頃からできたんだということですね。そこに宗教的儀式をして葬った痕跡があるかないかが問題になってくるわけであります。それは20万年前からだという風に言われております。歴史と言っても、1万年単位の歴史ですから、今我々が生きている年代で考えれば、とてつもない幅があるわけですよね。だけど1万年単位というそういう単位で命というものは進化していく、また変わっていくという風に人類史的には言うことができます。1万年単位で変わっていくというそういう歴史というものを考えるならば、今から約20万年ぐらい前に人間は人間としての生き方を始めた。動物じゃない、人間としての生き方を始めた…ということができて、その最初に人類が持った文化、作った文化が原始宗教だと。それを持つことによって死者を宗教的儀式をして葬る…そういうことをした。その痕跡が地層から出てくるわけですね。**

**これは一体何を意味してるのか。それを考えていくためには、なんで原始宗教というものを今から20万年ぐらい前に人類は作ることになったのかということを考えていかなければなりません。今から20万年より古い時代というのは、人間がまだ他の動物と生存競争をしながら食うか食われるかの生き方をしておった。しかもまだその当時は地殻変動が非常に激しい時代。あちこちで火山が爆発したり、あるいは地震、それも今考えてるものではなく、地割れが起こるような規模のもの。自分が立っている場所も地割れし、股裂きの刑になっちゃったりなんかして。激しい、信じられないような地殻変動というものが当時はたくさん起こった時代でありました。当時のことを漫画なんかでは、はじめ人間ギャートルズの時代。そのはじめ人間ギャートルズの方々がいらっしゃった時代というのは、まさにそういう地殻変動が激しくて、自分の身の回りに起こる出来事が「なんでこんなことが起こるんだ」と不安で不安でしょうがないと、恐ろしいという、そういう心情が当時あったわけであります。**

**自分の身の回りに起こる出来事が、何で起こるのかわからない、不安で心配で恐怖でとても耐えられないと、そういう気持ちになることはありませんよね。まず何でこんなことが起こるんだろうと人類は考え始めたんですね。火山の爆発も大地震も、そんなこと俺たちがやってんじゃない。俺たちではできないよなと。だけど、こんなことが起こるということは、俺たちよりもっとすごい力を持ったやつらがどこかにいて、そういう輩がそういうことをやっているに違いないと考えた。これを擬人的類推といって、自分たちの日常の生活の仕方や日常の信条・気持ちというものをベースにして、自然現象を理解する…これを擬人的類推と言います。**

**最初に人類が作った宗教というのは、ほとんど神話という風な形で表現されておりますけど、まさに神々が人間と同じような生活をし、人間と同じような心情を持って天国で生きてらっしゃる、とそういう物語が神話の物語なんですよね。あれがまさに擬人的類推という方法で神の世界を描いた証拠であります。原始宗教というものも、擬人的類推という方法で作られてきたものであります。擬人的類推で考えると、俺達はこんなことできない、でも実際に起こる。ということは俺達よりもっとすごい力を持ったやつらがどこかにおって、そういう輩がこんなことをやらかしていると考えるって事になるわけですよね。そう考えることによってどういうことが起こったのか。目に見える現実にはすごい力を持ったやつがどこにおるかわからん。だけど目に見えるものの背後・向こう側に、目に見えざる者がいて、この目に見えざるものが目に見える現実を支配してるんだ。我々が病気になるのも、怪我をするのも、また火山が爆発するのも地震が起こるのも、全部そういう輩が現実を支配してやっているんだ、という風に擬人的類推で考えるとするならば、そういう輩がそういうことをしないようにこちらの方からアプローチして、「そんなことはせんといてください」と言ってお願いすれば、ひょっとしたらそれを聞いてくれて、自分たちが困ることはしなくなるんじゃないだろうかと、擬人的類推で考えるわけですよね。**

**その結果、人類はどんなことをし始めたのかといったら、目に見えざるものを意識しながら、みんなで踊ったり、太鼓を叩いたり、あるいは自分たちが一番大事にしてるようなものを貢物として捧げたり…そういうことをして何とか目に見えざるもののご機嫌を取ろうという、それが祭りというものの始まりであります。祭りとは全て神を意識した行為なんですよね。それは原始宗教が成立する根拠の中に祭りの始まりがあります。政(まつりごと)というのは、政治を意味するわけですが、政治はやっぱり人間が生きる社会から不安を取り除くということが、政治の大きな役割がであります。政治というものは、原始宗教の祭りという行事から不安を取り除くという人間の活動から始まった。人類史というのは、不安を取り除き、安心をもたらすことが政治・経済・社会・文化、人間の活動の根本の心情であります。どうしたら不安を取り除き、安心して生きるという現実を作れるか。不安から安心へ、このプロセスが歴史を動かす根本の原理なんですね。**

**人類が原始宗教を作りました。これを作ることによって、どういう力を持ったのか。人類は目に見えるものの背後に目に見えざるものがいて、それが現実を支配してるんだと。そういう理解の仕方、難しく言うと世界観と言えますが、世界がどうなっているのかという説明の仕方を原始宗教を使って、初めて持つことができました。この目に見えるものの背後に目に見えざるものを見る。目に見える現実は具体的・具象的な世界。だから目に見えるものの背後に目に見えざるものがいるというのは、抽象的な世界であると言われています。目に見えざる抽象的な世界というものが存在することを前提にして原始宗教が成立したわけであります。神が存在するというのは、目には見えませんけど、意識の中で目に見えるものの背後に目に見えざる神、超越的存在があるんだと確信したわけですよね。そのことによって人間に初めて抽象能力、物事を抽象化する、抽象的に理解する力が人間に宿ったわけであります。そういうことを宗教でできることによって、我々は目に見えざる世界との交信と言うか、それらを始めて、病気になったら目に見えざるものを意識しながら、色々お供えをしたり、いろんなことをして病気が治ることを祈る…そうすると結果的に病気が治った…「こういうことをしたら病気を治してくれるんだ」ということを知ったり、「こういうことしたら火山の爆発をおさめてくれるんだ」「こういうことしたら地震がなくなるんだ」ということを色々やってみながら、人類は体験して、だんだんだんだん「こうしたらいいんや」ということをどんどん定着というか、祭りの仕方というのが、だんだんと形になって出来上がっていたわけです。**

**まず人間が動物から独立というか動物とは違う、犬猫ではないぞ、という生き方ができる出発点となったのは、目に見えるものの背後に目に見えざるものを意識するという力を持った…ここから人間という歴史が始まったということですね。目に見える現実の様々な問題に我々が支配されている限りは、それはまだ残念ながら動物的次元の生き方であって、我々は現実を生きるために、目に見える現実に支配されるのではなく、目に見えるものの背後に目に見えざるものを意識しながら、目に見える現実を生きて、目に見える現実をより良いものに変えて行くという生き方をしないと、人間的な生き方とは言えないということになってくるわけですね。動植物は与えられた現実にどう適応し、どう対応するかということしかやりませんけど、人間というのは与えられた現実をより素晴らしいものに変えていくかという、そういう生き方をするところに人間的価値のある生き方というのは生まれてくるわけですね。そういう生き方をすることによって人類が作ったものが、文明であり文化であり歴史であります。**

**なぜ人類は文明や文化、歴史を作ることができたのか？ それは目に見えるものの背後に見えざるものを見たからであります。動植物は自らが歴史を作ることはできません。動植物は自ら文化は作れません。自分で文明は作れません。人間が何で文明を作り、文化を作り、歴史を作る、より素晴らしい発展を実現する…そういう生き方を今日までしてこられたのか。その出発点が目に見えるものの背後に目に見えざるものを見るという、そういう力を持ったところから全ては始まりました。**

**目に見えるものの背後にある目に見えざるものとはなんなのか。それは神のみではない、仏のみではない、超越的存在のみではない。目に見えるものの背後にある目に見えざるものとはなんなのか。それは未来である、夢である、理想である、希望である。すべて目に見えない世界の存在であります。それから過去も目に見えないもの。過去を意識しながら現実を生きていればまた違った生き方ができる。物事の本質を意識しながら現実を生きる。また物事の法則を意識しながら現実を生きる。あらゆる目に見えないものをいろいろと作り上げてきたのが、人間の文化・文明・歴史というものの具体的な内容であります。**

**目に見えるものの背後に目に見えざるものを意識しながら、目に見える現実を生きるということが人間的な生き方なんだ。だから、経営でも経営計画を立てて、そして5年先10年先を意識しながら、そのために今何をしておかなきゃならんか、ということを考える…それを経営においてもやっているわけであります。それは人間的な生き方の基本である。理想や夢や目標を持たなければ、今何していいかわからない。だからそういう経営はぶれる。明確な成長の歩みを積み重ねていくことはできない。現実の様々な状況や問題に振り回されて、ただただ問題に苦しみ悩むだけで、具体的な成長を実現することはできません。人間が本物の人間として生きる基本は、未来に理想や夢や希望や目標を掲げて、それを作って、それを意識しながら現実を生きるというところから人類史は始まったんだということです。**

**そのように人間は動物にはない抽象能力というものを原始宗教を通して獲得したわけであります。そういう方法で神の存在というものを信じて、問題が起こってくる現実というものを生き抜いていく力を獲得しました。どういう風にしたら問題を解決できるのか、それは神との関係性で、神に祈って、具体的には巫女さんがいて神のお告げを頂いて、神様はこのように思ってらっしゃる…と皆に伝えて、それをみんなで行って、そして不幸なことが起こらないようにみんなで祈ると…そういうことを人類はし始めたわけであります。**

**それは一体どういうことなのかってことなんですけど、原始宗教を持つことによって、人類が生きる力を具体的に持つことになった。それまでは不安で不安でしょうがないから、不安や恐怖があると未来に向かって積極的に行動しようという意識が出てこない。現実でもそうですが、不安なことが自分の心の中にあると、なかなか不安というものが災いして未来に対して積極的に行動するということができない、恐怖があると現実から逃げようとするということになって、未来に向かって挑戦していくということができないですよね。まずは不安や恐怖を取り除くということは、一番積極的に生きる力を作っていくには大事な問題であります。**

**不安・恐怖を取り除くということを原始宗教という世界観を持つことによって人間はできた。そのことによって、未来に向かって自信を持って生きるという生き方ができた。すなわち神を信じることによって、人類は生きる力、信じて生きるという力を獲得したわけであります。**

**ここから学ばなければならないことは、基本的には目に見えるものの背後に目に見えざるものがいる。その目に見えざる世界が目に見える現実を支配しているんだ。だから目に見える現実よりも目に見えざる世界の方がもっと大事なんだという抽象的世界の意味をまず人間は理解すること。意味や希望や理想、目標を持って生きることが大切なんだ。それなしには今何をしていいかわからないんだ。そのことをまずちゃんと掴むということが、人生を生き、仕事をする上で大事な原理であります。**

**その次に大事なことは、信じて生きるって言うことが大事なんだ。信じる力が大事なんだってことを原始宗教は人間に教えてくれました。信じられない、不信というものが出てくると、何もする気力もなくなってしまう。信じて初めて何か行動できるって言うことになってくる。人間が本当に積極的に生きようと思ったら、信じるものがあるかないかが大事なんだ。生きる根底には、信じる力がある。信じるってことが、生きる上で大事な原理である。信じられないと何事もすることができない。する気にならない。不信というものが出てくると、全てあてにならないとなってしまって何をする気も起こらないことになってしまう。なら信じるっていうことは非常に大事だ。人を信じる、上司を信じる、リーダーを信じる、経営者を信じる…そのことによって、その会社で働くという具体的な、意欲が出てくることになるわけであります。**

**であるがゆえにリーダーは部下に信頼されるということを大事な課題に、自分の成長の課題にしていかなければなりません。とにかく原始宗教というものは、信じる力というものの大事さ、大切さを人類に教えてくれた…そういう力を持っております。それから我々は信じるという力を持って生きることが大事なんだってことが分かれば、信じることができるものをどうして作るのか。そのためにまず自分が人生を生きるために自信が必要であって自信がないと何事もできない。自信があって初めて何かができる。また人間は自信を作るためにいろいろなことをするということになっていくわけですね。そういう意味で自信を作ることは非常に大事な、仕事をする上でも人生を生きる上でも大事な課題であります。**

**どうしたらいったい自分が信じられるのか、自信が持てるのか。その自信を持つための原理として人類が作り出したものが学問であります。学問的知識っていうものは、みんながそうだと認めなければならない根拠が明確に与えられているものである。だから学問的知識を獲得することによって、いま自分がやってる仕事における学問的知識を獲得することによって、みんなを納得させることができる。みんなを納得させる生き方ができる。そういうことになってくるわけですよね。**

**「何で学問が発生したのか」。それは人間に自信を持って生きる力を与えるため。「何で学問が人間に自信を与えるのか」。それは学問が「なんでそうなるか、どうしてこうしなきゃならんのか」という根拠を明確に与えている。そのことによって人間は自信が湧いてくると。その自信というのは、社会というなかで必要とされるものであって、多くの人と一緒に生きていこうと思ったら、自分の言うことが相手に認めてもらえる…そうなって初めて自信が湧いてくる。多くの人がそうだと認めなければならない根拠が与えられたと言われるものが学問ですから、多くの人が強制的に与えられているものを自分は身につけることが、まず自分が自信というものを作る根本の原理だと。**

**だから人類は学問を作ったんだ。学問というのは、自分が自信を持って人生を生きるための力になる。ということで我々は学校に行って勉強するわけですが、自信を持って生きる…そういう信じて生きることのために必要なのは単なる学問だけではない。もう一つ自信ということにとって大事なのは、体験である。体験は、やった人間しかわからんという、そういうものを与えてくれるもので、体験は真実を語る力だ。体験なしに真実は語れない。いろんなことを体験して、具体的に仕事において結果を出す。この体験を通して具体的に結果を出すということが、また人間に自信というものを与えてくれる大きな力になります。人間が仕事をし、人生を生きるためにまず必要なのは自信だ。信じるという事だ。信じるものを持つということだ。自分を信じるためには学問が必要だ。自分を信じるためには体験として結果を出すことが大事だ。組織で生きてくためには人を信じることが大事だ。上司を信じることが大事だ。信じるという力があらゆることを実現する根本になる力である。**

**だから人類は原始宗教という信の文化という、信じるという文化をまず最初に作った。それは人類はなんで原始宗教という宗教を最初に作らなきゃならなかったのかっていう理由であります。生きるためには信じなきゃ生きられない。不信があったのでは、積極的に生きられない。であるがゆえに積極的に生きるという事をするために人類は信じる文化、信の文化、原始宗教というものを作り出さざるを得なかった。そういうことを我々は歴史から学ぶ必要がある。人間にとって一番大事なのは、目に見えるものの背後に目に見えざるものを見る力だ。目に見える現実に支配されていたのでは、動物だ。目に見えるものの背後に目に見えざるものを見る力を持って、初めて人間足りうる。それが理想だ。夢だ、理想だ、希望だ、目標だ、過去だ、未来だ、本質だ、法則だ。そういったものを意識することによって我々は現実を力強く生きていくという、そういう力を獲得することになって、人類は文明文化を作り、歴史を作ることをやり始めたわけであります。**

**そして、そこでもう一つ大事なことは、信じるということが大事なんだ。信じるというものを持つということが大事なんだ。信じることの出発点は、自分を信じられるかどうかなんだ。自分を信じられなかったら我々は積極的に何かをするということは出来ない。まず信じることができる、信じるに足る自己を作る、信じることができる自己を作るということが、まずは人間が生きる仕事をする上でも大事な課題だと。そのことのために人類が作った文化が学問である。もうちょっと自分を信じて生きるためには、我々は行動して実践して体験して、そして真実を語る力を作っていく。体験は人間に真実を教えてくれるんだ。どんなに知識を持っていても、「行ってみたらこうなっとったんや、行ってみたらこうやったんや」となっていったら、どんな知識を持っていても反論できないですよ。「行ってみたらこうやったんや」という体験を語られたのでは、「そうやったん」と言うしかないんです。それほどに体験というものは真実を語る力というかけがえのない価値を持っておるわけであります。これがまた人間に自信を与えてくれる。体験の数だけ人間は成長する。体験の数だけ真実を語る力を獲得するんだ。体験なしには本当のことはわからん。これも自信というものを作ってくれる。だから我々は日々仕事においていろんな体験をさせてもらうんですけど、それが全部自分の自信を作り、自分を成長させてくれている。体験の数だけ人間は成長するんだということを忘れないで下さい。失敗の体験も大事だ、成功の体験も大事だ、叱られる体験も大事だ、全ての体験は全部自分を成長させてくれる。真実を語る力を自分に作ってくれる。何ひとつ人生は捨てるものがないと。全ては宝だと。そういう生き方を我々はしていかなきゃならないと。そういうことをしなきゃ駄目ということを原始宗教という文化の作られ方というか、その作られるところ・プロセスから我々は学ぶことができるわけですね。**

**人間になるとはどうなることなのか？ 人間として生きるというのはどういうことなのか。その出発点に、そういう問題があるという事をよくわかっておいてもらいたいと思います。それを通して、仕事というものをする上で大事なことはなんなのかということもそこから考えてみてもらいたいと思うんですね。原始宗教を持った次に人間は何ができるようになったのか。原始宗教を持つことによって、抽象的世界を作る能力、抽象能力を獲得しました。そのことによって人類はどういう成長を遂げたのか。抽象概念である言葉を作る、言語を作るということをし始めたわけであります。言葉というのは抽象概念と言われるわけですけど、抽象概念というのがどこかで作られていなかったら、言葉を作るという結果は出てきません。どういうふうにして人類は抽象概念を作る、言葉を作るという力を獲得したのか。**

**これが目に見えるものが背後に目に見えざるものがあるという、原始宗教の成立の根拠というもののなかに、人類が抽象概念である言語を作ることができるようになったという原因が存在するわけです。抽象能力なしには言葉は作れません。抽象能力というのを原始宗教によって獲得した人類は、現実を抽象化するということを始めました。何故抽象化するのか？ それは目に見える現実よりも目に見えざる世界の方がより真実であり、より大いなる力を持っておるんだということを原始宗教を通して知ったわけです。目に見える現実は目に見えざる抽象的世界に支配されているんだ。だから、目に見える現実よりも抽象的世界の方が大事なんだ、価値があるんだ…そう思ったから人類は現実を抽象化することを始めました。そのことによって、人類が作り出した文化が言語の世界、言葉の世界、抽象概念の世界であります。**

**なんで言葉というものを人類は作ることができたのか。なかなかいろんな本を読んでも書いてありません。これは私のように感性というものを原理にして物事を理解しようとすることによって、その言葉が出てくる原因あるいは構造・根拠というものを解明することができたわけであります。だから皆さん方もいろんな教育を受けて、いろんな本を読んでらっしゃると思うんですけど、なんで言葉を人類が作ることができたのかということが書いてある本は一冊もありません。あと今私が申し上げたように言葉を作るためには、抽象能力というものがまず存在しなければならない。その抽象能力を作ってくれたのが原始宗教なんだ。そのようにして人類は言葉というものを獲得しました。言葉を獲得することによって、どういうことになっていったのかと言ったら、自分の思いを言葉によって表現することができるようになったんですね。そこで、どういう風に人間として成長していくということになっていったのかと言うと、宗教という文化があることによって神というものを言葉で表現することができることになりました。だからキリスト教のバイブルの中でも、はじめに言葉ありきというそういう文章が出てきます。言葉というものは、何があるのかを証明するものであって、言葉がないということは意識がないということなんですよ。意識がないということは何も存在しないということ、わからんということです。意識があるということによって、ものに対する思いが湧いてくるのであって、意識を具体的に表現するものが言葉なんですね。言葉があることによって何かが存在し始める。そこで人類は宗教を作ることによって神または仏などという存在を言葉で表現できるようになった。言葉を作ることによってどういうことになったのかと言うと、神は現実を支配している完全なものだ、絶対なものだ、完璧なものだ。だけども人間は神じゃない、俺たちは神じゃない。俺たちはそんな凄い力を持っているんじゃない。言葉を持つことによって、「俺たちは神ではない。俺たちは完全ではない」だから不完全だ、という人間に対する最初の自己規定が出てくるんですよ。自分に対する意識というのは、自己認識というのは、そうすることによって作られてきた。言葉というのは作られることによって、人間は明確な自己意識、自己認識を持って、生きるということができるようになっていった。人間というのはこういうものでなければならない。そのことが初めて言葉によって規定されて、それを自覚して、それを目標に生きるという生き方が始まったわけであります。ここから我々は今言っている人間性が生まれてくるんですね、言葉を持つことによって。**

**意識が言葉によって表現され、初めてその意識は現実化する。言葉にならない意識は現実には存在しない。無きに等しい。そのように考えていくと、まず人間が人間であるために最初に思った、本物としての人間の生き方というのはなんなのかと言ったら、“不完全性の自覚”というものなんですね。「俺は完全じゃない、俺は神ではない」この不完全さの自覚というものが、人間としての生き方を人間に具体的にさせ始めたもので、人間の核を作る上での第一原理だと言うことができるわけであります。人間が人間の核を持った本物の人間になる、犬猫ではないぞと言う、そういう自分というものを作って行こうと思ったら、まずは何が大事かと言うと、不完全性の自覚だ。これなくして人間ではありえない、人間にはなりえない、人間足り得ない、と言うことができるんですね。なぜならば、不完全性の自覚というものは、人間にしか持てない自覚なんだ。神にも動物にも持てない。この人間にしか持てない不完全性の自覚を持たずして、どうして人間として本物だと言えるか。不完全性の自覚は人間にしか持てないんだ。神にも動物にも持てないんだ。神様が自覚を持つならば、完全性の自覚でなければならないですよね。神様がうっかりなんかしちゃったりなんかしちゃったりして…、神様がうっかりですよ、「人間の持てるような自覚を俺が持てないわけがないじゃないか」と思ってしまっちゃったりなんかしちゃったりして…神様が不完全性の自覚を持ってしまったら、神でなしになってしまいますよ。そういうわけにはいかん！ということですよ。**

**神様が自覚を持つなら、完全性の自覚。不完全性の自覚など神が持ったらいかん。というよりも持てない。**

**では、動物は？ 動物は存在論的には人間と同じように不完全な存在なんですけど、動物は完全なるものを意識する力がない。動物は原始宗教などを作り得なかった。神という存在を意識することはできない。だから動物は自分が神ではない、自分は完全じゃないという意識を持つことができない。人間だけが不完全性の自覚という意識を言葉として持つことができる唯一の存在である。であるがゆえに我々は人間としての“しるし”として不完全性の自覚という言葉をまず自分の頭に記憶させなければならない。言葉を持つということが、人間として生きる基本なんだ。言葉がないということは無自覚なんだ。いい加減に生きているという事なんだ。言葉を持つことによって自覚的に生きることができる。これが言葉を持つ人間の大事な生き方であります。言葉を持つということが自覚的に生きるという事なんだ。言葉がないということは、無自覚でいい加減なんですね。確信のない自信のない生き方をしているという事になってくる。**

**とにかく人間は、人間とは何かということをどういう風にして知ったのか。神という意識を持つことによって「俺は神じゃない。神は完全だ。俺は神ではない。だから不完全だ」ということから不完全性の自覚という言葉を作った。これがまず人間が人間らしく生きる根本の原理であります。**

**人間は傲慢になったときに人間であることを根底から失格をする。人間にとって傲慢さほど恐ろしいものはない。傲慢さほど醜いものはない。いついかなる場合であっても、傲慢であってはならない。傲慢な目つき、傲慢な表情、傲慢な態度、傲慢な物言いをすれば、その瞬間に俺は人間でなくなるんだということをまず我々はいつもいつも心得ていなければなりません。**

**傲慢さほど恐ろしいものはない。傲慢さほど醜いものはない。実際問題、政治家や地位の高い人たちが傲慢な物言いをして、人を見下げるようなことを言っている姿を見たら、我々はそんな人間を信頼できない、尊敬できない。いろいろと内部告発を受けたり、あるいはいろんな対立を自ら作ってしまう原因は全部傲慢さゆえであります。**

**それがゆえに現実的に傲慢であってはならないということが大事になってくるのですが、原理としては不完全性の自覚というものが人間には常になければならない。いかなる意味においても完全ではない。だから完全を目指して努力しなきゃならない。「俺は完全だ」と思った時に成長が止まる。傲慢さが出てくる。慢心に陥る。醜い人間になる。不完全性の自覚という言葉を持っただけでは観念だ。本当に人間が人格と言われる人間性というものをものにしようと思ったら、不完全性の自覚という言葉が命に染み込んで、肉化して体得されて身につかなければ人格ではない。人格は観念ではない、人格は言葉ではない。では、不完全性の自覚というものが言葉を超えてだんだん深められていって、身につけばどうなるかと言ったら、そこからにじみ出る謙虚さというものが湧いてくる。命から理屈抜きに湧いてくる謙虚さを持って、初めて人間として本物と言うことができるわけです。**

**不完全性の自覚だけではまだ浅い。まだ観念であって身についてない、偽物だ。謙虚にしなくっちゃとか、不完全だと意識しているだけでは単に飾りだ。♪飾りじゃないのよ涙は♪ですからね。本物は湧いてくる。湧いてきて初めて本物だ。中森明菜の歌に♪飾りじゃないのよ涙は♪とありますけど、本物は湧いてくる、湧いてきて初めて本物だ。**

**お客さんには謙虚にしなくっちゃ、親切にしなくっちゃと思っていても、単なる知識として持っているだけだと、相手が客じゃないと分かった途端に傲慢に変身～っと、突然人格が変わってしまう…そういう人も多々あります。本当に謙虚さというものが命から湧いてくるという状態になって、初めてそれは人格が身についたという、肉化された・体得された・本物…と言うことができるわけであります。**

**では、不完全性の自覚という言葉が、観念が、身につく・肉化する・体得されるためには、どうしたらよいのか。具体的に、実践的に考えなければなりません。そのためには、二つの重要な課題があります。**

**まず一つは、人間というものは誰でも長所半分・短所半分、そういう構造でできているんだと。どんな立派な人間でも必ず他人から嫌われ、他人から嫌がられ、他人から非難されるところを半分は持っておるんだ。どんな落ちぶれた人間でも、他人よりもすごいところが半分はある。それが人間というもので人間性の構造であります。人間は誰でも長所半分・短所半分。世間でどんなに尊敬されて立派な人だとされていても、奥さんに聞いたら「あんな人になってしまったけど、どこがそんなに良いの？」となってしまって、普通の男になってしまう。ちょっと見には良くっても、長～く一緒におったら最終的には自分から見て嫌なところが必ず半分は出てくる。これは避けがたい宿命なんです。人間と長く付き合おうと思ったら、必ずどんな人間でも短所は半分ある。自分から見て嫌だなと思うところが半分は必ず出てくるんだ、これは致し方ない宿命なんだと。それはそれで良いんだと、そういう覚悟を払わなかったら人間とは仲良くできません。いちいち嫌なところを非難して相手を責めていては、人間関係は持たないし、長続きはしない。そんな小さな人間では社会を生き抜いてゆくことはできません。**

**人間を愛するとは、長所も短所も愛すること。長所しか愛せないでは、人間を人間として愛する資格がない。人間には誰でも長所も短所もあるんだ。その人を愛するということは、その人の短所も長所も丸わかりなんだと。人間は誰でも長所半分・短所半分という構造で成り立っているという根拠はなんなのかと言うと、人間というのも大宇宙の一部を占める存在である。我々は宇宙の摂理によって作られた命というものを頂いているわけですけど、ただ宇宙によって作られた命であるだけじゃなくって、今我々が生きている自分というのは確実に大宇宙の一部分なんだと。宇宙は我々の外にあるんじゃない、自分自身が大宇宙の一部分なんだ、我々も大宇宙なんだと。**

**では、宇宙とは何なのか？ 宇宙というのは、プラスのエネルギーとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、お互いがエネルギーバランスを模索しながら宇宙の秩序をつくっているというのが宇宙の摂理と言えるものであります。そういう宇宙の摂理に基づいて万物をクリエイトする。宇宙の具体的な構造というのは対存在と言って、すべてのものは一対と言える構造で成り立っている。だから、プラスにはマイナスがあり、光には影があり、陰には陽が、真には偽が、善には悪が、男には女が、動物には植物が、お互いに違う原理に基づく存在なんだけど、それはお互いに協力し合って初めて生きるということができている。それが宇宙の姿であります。これが対存在の原理と言います。宇宙というのはあらゆるものが一対という構造で成り立っている。人間の命にも一対が成り立つ。長所半分・短所半分ということ。そういう人間理解というものを我々はしなければなりません。どんな立派な人間でも必ず他人から嫌われ、他人から嫌がられ、他人から非難されるところを半分は持っておるんだ。どんな落ちぶれた人間でも、他人よりもすごいところが半分はある。そういう目で人を見なければなりません。そして、長所も短所もなくならない。なくならない短所をなくそうとしてもいけないし、伸びる長所をとことん伸ばす…これが人間として成長していく基本原理だ。短所をなくそうとする努力は無駄な努力だ。1日でも早く他人から一目置かれる素晴らしい能力を作る…これが人生をおもしろおかしく生きるために大事な課題であります。**

**長所を伸ばして他人から一目置かれる能力を作る。短所をなくす努力はしない。なんでか？ 人間の本質は理性ではなく心だ。人間の本質が理性であったのならば、なくさなければなりません。なぜなら理性は人間に完全性を求める能力だから。だけど人間の本質は理性ではない、心だ、感性だ。人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心を作ってくれるのは長所ではない、短所だ。短所がなかったら人間は謙虚になる理由がなくなってしまう。短所がなくなったら謙虚になれない。傲慢になるっきゃない。だから人間が本当に人間らしい血の通った温かな、謙虚な優しい心を持とうと思ったならば、どうしても短所がなければならない。短所がなくなってしまったら謙虚になれないんだ。傲慢になるしかない。だから短所は大事になくさないようにしっかりと持ってることが大事なんだ。**

**だけど、短所があるだけでは人間ではない。長所を伸ばさなければ人間としての価値を社会において持つことができない。他人の役に立つことできない。長所を伸ばして他人の役に立つ力を作る。存在感のある能力を作る。他人から一目置かれる能力を作る。そうすると、なんの努力をしなくても短所は人間の味に変わるんですよ。長所を伸ばさなかったら短所は単なる短所で他人が嫌がるだけ。長所を伸ばすと短所はだんだん気にされなくなってきて、長所が他人から一目置かれるほどの能力になってくると、短所は人間味という人間の味に変わる。「あんなすごい力を持っているやつでもこんなところが面白いよね」と。「なんか人間として親しみを感じるよね」という風に短所は変わってくる。長所を伸ばせなかったら短所は短所で嫌がられてしまう。長所を伸ばしたら短所は人間味、人間の味に変わる。これは長所も短所も活かして生きると言う、人間としての本物の生き方であります。**

**だけども、短所が出てきたら嫌われちゃいます。短所は出てこないように気をつけなければならない。その一方では長所を伸ばす努力をし続けることが大事なんですけど、短所が出てきたら嫌われちゃうから、短所が出てこないように気をつけることが大事。だから部下に注意する場合でも、「君の短所はここ。この短所が出てくると君は損をするから短所があまり出てこないように気をつけようね」と言ってあげなきゃいけない。それが愛。また短所が出てきてしまったら竹を割ったようにすぐに謝る。短所が出てきたらすぐに謝る。出てこないように気をつけなければならない。そのためには短所を教えないとならない。人間らしく生きるためには、短所の自覚と長所の自覚が必要だということ。短所の自覚を持つことによって謙虚な心を作り、人に嫌われないように短所が出てこないように気をつけるという配慮のある心遣いのある生き方ができます。長所を伸ばすことによって人の役に立つ、社会的存在として活躍できる。この長所も短所も生かすことができて初めて人間らしい生き方ができる。**

**この生き方を感性論の哲学では、角熟と言って、普通であれば円熟と言って真ん丸の円になることを求めるのが昔ながらの人間の成長の目標でしたけど、円熟はありえない。真ん丸にはなれない。人間には皆、個性がある。あちこちデコボコだと。デコボコのまま、そのまんま東になる・さんまのまんまで熟していくと、角熟という世界になる。角ばったまま熟していく。丸くはなるな、尖って生きろ。それは喧嘩をするんじゃない。長所も短所も磨いて、そして人の役に立つ生き方ができる。**

**その角熟という状態になるには短所も使わなきゃならない。短所も生かさなきゃならない。まずは短所があるから人間らしい心が出来る。だから、短所をなくしてはいけない。本当に短所を活かそうと思ったらどうするかと言ったら、自分の短所をさらけ出して人に助けを求める。「俺ここ苦手なんだ」と代わりにやってくれる人に代わってもらう。そして、「ありがとう。本当に君はすごい力を持っているね。本当に君と友達になって良かった」と相手を褒め称える。ますますその人は自分のために働いてくれる。これは昔からよく言われる、「実るほど こうべを垂れる 稲穂かな」という言葉。地位が上がれば上がるほど、人間はますます謙虚になる必要がある。**

**では、どういうふうに謙虚になるか。地位が上がれば上がるほど、部下が増える。部下が増えてくるから、部下に仕事をさせなきゃならない。どのように部下に仕事をさせるのかと言ったら、上司が自分のやるべき仕事が増えたところを部下に代わってやってもらう。「俺はここが不得手・短所だから、君にやって欲しい」と。上に立てば立つほど、上司というのは自らの短所を、不得手・欠点をさらけ出して、部下に仕事をさせる・部下に仕事を与える・部下に仕事をしてもらう…そういう力を作っていかないと、上司は地位が上がれば上がるほどいろんな仕事が増えてきますし、またいろいろと難しい問題も出てきますから、そのことによって上司は自ら苦しくなってしまう…よく中間管理職がうつになるというのは世間でも言われています。そうならないためには、できるだけ、できるだけ仕事を部下にさせて、そして自分は役職として、しなければならないその立場独特の役割を果たすことに専念できる。そういう状態を作っていかなきゃならない。そのためには自分の短所を晒して、できるだけ部下に仕事をさせる…これが感性型リーダーの大事な能力であります。短所をさらけ出す勇気を持たなければ、組織において有能なリーダー、経営者にはなれない。できるだけ部下に仕事をさせる、そのことによって部下の能力を引き出してあげて、部下を成長させてあげる事が出来る。こういう生き方を角熟と言います。**

**自分自身に完璧や完全・絶対を求めない。自分が不完全であることによって部下を成長させることができる。別の言葉で“活人力”と言います。相手の力を活かし、相手の存在を輝かせる力。真の活人力は自らの短所をさらけ出すことによって可能になる。長所で人の役に立つだけでは相手を惨めにさせる。助けてもらって初めて人間だ。助けてあげるだけでは半分。助けてあげることと助けてもらうことは同等の価値がある素晴らしい行為、素晴らしい人間。もっともっと我々は、助けてもらう力を作っていかなければならない。そのことによって相手の存在を輝かせる、相手を褒め称えることができる。これも短所を活かすという生き方の実例であります。**

**長所も短所も活かして使うという生き方をすることによって我々は常に謙虚さを忘れない。不完全さを忘れない。本当に人間味のある生き方が可能になっていくわけであります。この努力をしていけば確実に謙虚さというのは身につく。肉化する。そして謙虚さが自然と命から湧いてくる。そういう人格になることができるわけであります。**

**もうひとつ謙虚さというものを作る、命から謙虚さが湧いてくるようにしていくために大事な原理は、謙虚な理性を持つということであります。理性というのは、あまりにもこれまで信じられすぎてきて、「理性は絶対なんだ。理性は完璧なんだ。理性で考えたことは皆に共通する完全な心理なんだと、いう理性信仰が近代を支配してきました。理性は信じられる、皆そう思ってたんですね。現在でも理性を信じて仕事をし、理性を信じて学問研究をするということはまだまだなされています。昨今、ようやく理性とはいったいなんなのかと原理的に反省し、考える時代になってきました。**

**なぜならば、理性を原理にして生きてきた結果、何が起こったのか？ 自然破壊・環境破壊・人間性の破壊…人間性の破壊の中には離婚の激増、幼児への虐待、高齢者への虐待、そして宗教や民族の違いによって殺し合う戦争、これが理性を信じて生きることによって作られた現実であります。自分の考えることは正しい。だからこれは皆が認めるべきだと思って、相手を説得する。自分の言うことを聞かない人間は許せないという意識になってしまう。なぜ理性はそうなってしまうのか。理性とは皆に共通するものを作る能力であって、理性的な人間は自分が正しいと思ったことを皆にわからせようとする。説得しようとする。説得は支配だ、対立を呼ぶ。自分と違う考えの人間の存在を許さない。自分と違う考えの人間を抹殺しようとする。だから戦争になる。それほど恐ろしい怖い能力であります。理性は違いを許さない。理性は真理はひとつと考えるし、また理性は矛盾を排除するし、理性は確執を追求する。理性的な人間は自分が正しいと思ったことを皆にわからせようとする。自分の考えを認めない人間を排除する。そういうところから、理性的な人間は考え方の違う人間とはやっていけない。宗教が違ったら殺し合う。感じ方が違ったら一緒に生活できない。価値感が違ったら一緒に仕事ができない。そういうことになってしまうんですよね。これは人間関係崩壊のなかで最も大きな原因であります。**

**現実的には価値観の統一を測らないと組織の団結力はできないという風に考えてる方が多いんですね。だけども、価値観の統一は支配だ。もうすでに世界は統一という意識から統合という意識に変わってきている。価値観を統一するんじゃない、あらゆる価値観を統合してその有機的相乗効果で仕事をしていくという力が求められているわけであります。もう世界は統合という言葉で動いてるんです。違うものを結びつけて統合して、そこから出てくる相乗効果が発展だ、成長だと考える。統一の時代は終わったんだ。これからは統合の時代だ。あらゆるものを有機的に結びつけて統合する。そして、いかなる相乗効果が生まれてくるか。その相乗効果の大きさが利益であり、成長だと考える時代になってきています。だから、価値観の統一を図ってはならない、価値観の統合を図らなければならない。いろんな価値観を持った人間を会社の発展のためにどう使っていくか。どうその価値観を、適材適所で使って、仕事をしてもらうか。そういう配慮がこれから大事になってきます。会社の団結力において必要なことは、社長の夢を全社員が共有することだ。今の共有、理想の共有、統一ではない。理想や夢を共有する。いろんな価値観を統合して、そして会社の発展のために適材適所で使っていく。そういうマネジメントが今日企業に求められておるわけであります。**

**理性的な人間は自分と同じ考え方の人としか一緒にやってけない。自分と同じ考え方の人しか愛せない。そういうことなんですけど、だけど自分と同じ考え方の人としか一緒にやっていけない。自分と同じ考え方の人としか愛せないということは、いつも同じように考えてくれないとやっていけないということですから、その人は自分しか認められない、自分しか許せない、自分しか愛せない人間であると言えます。自分しか愛せないような愛は偽物の愛。自分しか愛せないような愛でどうして子孫が残せようか。愛とは本来、種族保存の欲求というものから生まれてきたものだ。男が女を愛し、女が男を愛する。他者を愛するところに愛の本質がある。異なるものを愛して、初めて社会が成り立つ。社会にはいろんな考え方の人がいる、いろんな価値観の人がいる、いろんな性格の人がいる。そういう人たちと一緒に生きていくのが社会である。社会を生きるためには社会性が必要なんだ。社会性とは何なのか？ 違った性格の人ともうまくやっていける。違った考えの人とも仲良くできる。違った価値観の人とも一緒に仕事ができる。それが社会性だ。もしそれができなかったら、社会の秩序が崩壊しますよ。**

**社会を生きていくためには、組織を生きるためには、お互いの考え方の違い、価値観の違い、正確の違いを認めあって、それを活かし合って、助け合って生きていくしかない。それが社会というものだ。その社会が人間に求める力が社会性だ。だから我々はこれから理性に支配されないで考え方の違う人とも一緒に仲良くやっていけるという、矛盾を生きる力を求めていかなければならない。考え方の違う人と共に生きることを矛盾を生きると言います。感じ方の違う人と一緒に生活をすることも矛盾を生きると言うんですよ。本当に社会を生きていくためには、社会的存在として社会の秩序を維持して生きていくためには、どうしても矛盾を生きる力を養っていく必要がある。これなしには離婚の激増も戦争のない世の中も、平和な社会も作ることはできない。矛盾を生きる力なしには全ての人間関係はやがて崩壊する。それでもっともっと我々は理性的に謙虚になるということが必要になります。理性とはなんなのかって問題は非常にこれから、近代から次の新しい時代へと文明が変わっていく中で一番大事な課題なんですね。**

**それでは後半の話に入りたいと思います。**

**理性というものの在り方を問い直すと申し上げましたけども、これまで人類は理性を信じて生きてきました。けど、理性というのは神から人間に与えられたような完璧な能力であって、不完全な人間は理性に従わなくてはならないという理性信仰に陥り、理性を絶対的に信頼するという、そういう仕方で仕事をし、また文化を作ってきました。あらゆるものを合理化していくっていうことが唯一の新しい物事の処し方と考えてきました。でも、その結果、自然破壊・環境破壊・人間性の破壊という大きな問題が出てきてしまったわけです。そういう状況となって初めて本当に我々はこれからも理性を信じて生きていってもいいのかという反省が出てきておるわけであります。これをもって理性の不安という風に言ったり、あるいは理性の絶対的信頼は揺らぎ始めたという風にも言われております。ようやく人類は理性の盲信から抜け出すという、そういう時期を迎えておるということです。そこでまず理性とはどういう能力なのかということをちゃんと分からないと、理性的に謙虚になるという生き方はできません。**

**では、理性とはどういう能力なのか。おぎゃーと産まれた瞬間から140億個と言われている脳細胞はあるんですけど、脳はあっても考えることはできません。脳は肉体であって精神ではない。脳は理性ではない。脳は記憶細胞であります。記憶細胞が、人間が作った抽象概念である言葉を覚える。言葉を覚えただけでは考えられません。考えるということは言葉と言葉を結びつけることなんですね。しかも言葉と言葉を事実に合うように結ぶつけていくということをすることによって、合理的に考えるという正しい考え方というものが成り立つわけです。自分の考えが正しいか、間違っているかということをどのように確認するのかと言ったら、自分の考えたことは事実に合ってるかどうかを確かめて、実証という事実に合ってれば正しい、事実に合っていなければ間違っていると判断する。これが合理的に正しいかどうかを判断する基準であります。**

**だから、科学は実証主義と言って、事実を大事にする。言葉と言葉を事実に合うように結びつけていくということが合理的に考えるということなんですね。そういう風にして理性というのは作られてきます。理性能力は言葉が持つ限界を背負っているんだ。言葉というのは人間が作ったものですから不完全なものであって、言葉によっては表現し尽くし得ないものがある。言葉によって表現し得ないものを実態と言います。実態は言葉では表現し尽くし得ない。**

**よく座禅とか瞑想でそういう実態をつかもうと思ったらどうするかって言ったら、まず考えるなと言われます。考えたら言葉が出てくる。言葉は抽象概念。だから現実、実態から遠ざかる。言葉を使っては真実や実態は明らかにはならない。では、実態を掴むためにはどうするか。実態を掴むためには自ら行動して肉体を動かして、体験として掴んだものを原理として気づきというものを持つ。そのことによって悟りが生まれてくるわけですね。仏教における悟りとか、瞑想における気づきというものは、すべて肉体を通して実感として感じ取った気づきを悟りと言っているわけであります。**

**言葉を超えなければ、物事の実態がわからない、触れることができない。実態に触れるためには肉体を使わなければならない。言葉というのは抽象概念である。現実から離れておる、実態から遠ざかっておる、言葉では実態がわからない。しかも理性は言葉を原理として働くものですから、理性は言葉が持つ限界を背負っているんだ。言葉が不完全であれば理性も不完全だ。**

**では、どういう意味で理性は不完全かと言ったら、理性と言っても人間においては自分の肉体のある場所でしか考えられない。自分の肉体のある場所からしかものは見えない。自分の肉体にある場所からしか判断できない。だから人間が理性で考えたことは全部偏見である。偏見というのは間違ってるんじゃない、偏見というのは正しいんだけれども偏りがある、歪みがある。そういうものを偏見と言ってるんですね。人間は理性で考えたことは全部偏見である。そのことを本当にちゃんと分かるならば、自分の考えを皆に説得してわからせようとするようなそういう無理な、間違った努力をすることは避けなければならないってことになってくる。どんな立派な人間が考えたことも全部偏見だ。では、人間は偏見から脱却することはできないのかと言ったら、一人ひとりは偏見なんだけど、だけど偏見を乗り越える道がある。それは仏教で言われるところの「三人寄れば文殊の知恵」という言葉だ。一人ひとりは偏見なんだけど、三つの偏見を統合して、そしてまとめあげれば仏の知恵に近づくことができる。そういうやり方がある。自分の考えと、あと二つの違った考えを引っ張り出してきて、そして三つの考えを自分の中で統合して、最終的には自分の結論を出す。そのことによって人間は誰でも自分の偏見を乗り越えることができる。そして、より生きた現実に対応する、より正しい考え方を持つことができる。という風に仏教では考えられておるわけであります。これが、これからの人類が理性の使い方において成長するやり方、方法論なんですね。**

**これまでは欧米人は違った考えがあれば勝ち負けを争う、という説得をしてどちらが説得力があるかという競い合うような、ディベートということをやってきました。これでは社会は混乱して対立が生まれてくる。本当に平和な世界を望むならば、いろんな考え方を統合して、そして自分の偏見を乗り越えて、いろんな考え方を統合することによって、より偏見のない考え方に近づけて行こうとする努力、これが平和な世界を作り出す、あるいは離婚の激増を食い止める…そういうことにも役立ってくるわけであります。**

**自分の考えは偏見だ。三つの考えを統合することによって生きた現実に迫ることができる。それが仏の知恵ということになってくる。なんで三つの考えなのか。それは現実の社会、現実といういうのは一人称二人称三人称という構造で成り立っていて、自分の目から見たらこう見える、相手の目から見たらこう見える、第三者の目から見たらこう見える…という三つの視点を統合することで生きた現実が明らかになる。これが哲学的な現実認識の方法であります。一人ひとりの人間の考えは皆偏見だ。でも、三つの考えを統合したならば、個人の偏見を乗り越えることができて、より生きた真実に肉薄することができるということをこれからは考えていかなければならない。そういうことがわかってくることによって、自分の考えを無理に押し付けて相手を説得して相手にわからせようとする努力をするんじゃなくて、お互いが学び合って、そして偏見を乗り越えていく…そういう理性の謙虚な使い方ができることになるわけであります。そのことができるようになってくると、我々は理性的な謙虚さというものを持って現実を生き、いろんな人と関わるということができてきます。**

**自分と違う考えは、何で出てくるのか。自分と違う考えというのは、自分の考えの欠けているところを補うために自分と違う考えが出てくるという構造に宇宙はなってるんですね。宇宙の基本構造を対存在と申し上げましたが、自分は「こうだ」と言ったら必ず「そうじゃないじゃないか」と言うやつが出てくるというのが宇宙なんですよね。それが宇宙の摂理なんですよ。そうじゃなかったらおかしい。一対となって全体を表現するというのが、宇宙が持っている摂理であります。対立する意見が出てきたならば、それと言い争って勝ち負けを争うんじゃなくて、自分と違う意見というのは自分の考えの欠けているところを補うために出てきてくれているのである。だから相手の考えにも耳を傾けていかねばならない。だけども、自分が実践するためには、相手の言うことを聞いていたらダメなので、自分の考えでやっていかねばならないのですが、自分と違う考えを相手が言ってくれたのならば、「君の言ってくれたこの考え方もちゃんと心に収めてやっていきます」と言って、相手を満足させる・納得させる仕方をしていかなければなりません。**

**自分と違った考えは自分の考えの欠けているところを補うために出てきてくれているんだ。だからそれをちゃんと心に収めて、そして自分の考えでやっていく。なにか問題が出てきたら相手が言ってくれたことを思い出して考えを修正していく。色んな考え方を統合しながら、生きた現実に即応していくという、そういう使い方をしていかなければなりません。**

**これが謙虚な理性という在り方であります。理性的に我々は謙虚さを自分のものにすることができます。いろんな人の考えを心に収めながら、自分の考えで生きていく。問題が出てきたら、いろんな人にいろんなことを言ってもらったことを思い起こして、自分の考えを修正していく。そのようにして、だんだんだんだんと統合的な生き方、統合的な理性の使い方、いろんな人と対立をしない、対立を乗り越えて成長していく、そういう生き方ができる人間になれるわけですね。そのようにして理性的な謙虚さを我々はものにすることができます。**

**とにかく、謙虚さというのは命から自然に湧いてくるという。本物の謙虚さをつくっていくためには、人間は誰でも長所半分・短所半分という、長所も短所もなくならない、長所も短所も活かして生きていく…そういうことを考えることと、理性とは不完全な能力であって決して完璧な能力ではない。理性は言葉が持つ限界を背負っている。だから不完全だ。また理性というのは現実的には偏見しか作れない。だからいろんな考え方を取り入れて、自分と違う考えは自分の偏りを修正するために出てきてくれているんだ。自分の考えの足らざるところを補うために違う考えが存在するんだということを考えて、理性的に謙虚になって相手の言うことに耳を傾けて、そして自分の考えでやって行くんだけど、相手の考えも心に収めながらやって行くと。そういう大きさが人間に求められてくるわけであります。「君が言ってくれたこともちゃんと心に収めて、そしてやっていきます」と言うことによって、自分と対立する考え方を持った人間をも高揚して包み込んで、そして生きていくことができる人間になれると。これが不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さというものを作っていくやり方であります。**

**とにかく、まず人間が人間性として、本物の人間として生きるためには、不完全性の自覚からにじみ出る謙虚さというものを持たなければならない。いかに謙虚さが大事でも、謙虚・謙虚・謙虚じゃない鳥が鳴いてるみたいですからね、だから謙虚さだけでは生きられない。謙虚さも過ぎればこびへつらいになろう。謙虚さも過ぎれば弱さになる。**

**それで次に大事になってくる人間性は、不完全であるということは完全なるものを意識することができることによって不完全という言葉が出てくるんだということ。だから、人間が本当の人間としての生き方をしようと思ったら、不完全でありながらも常に完全なるものを意識して、不完全でありながらも完璧を目指すという、そういう生き方をする必要がある。だけども絶対に完璧にならない、完全にはならない。これをより以上目指して生きるというように言います。**

**より以上目指して生きる。具体的には成長意欲を持って生きるということ。成長意欲のない人間は偽物である。もっともっと人間として成長したいと思って生きるところに人間としての本物の生き方が生まれてくる。命は成長を望んでいる。人間は日々いろいろな体験を重ねながら、実際に成長しているはずなんだと。だけども、実際に成長意欲のない人間は、せっかくの体験も活かせない。「袖触れ合うも他生の縁」という、いろんな体験・経験を活かして生きていくことによって人間は成長できる。成長意欲のない人間はせっかくの縁も、活かし得ない・無駄にしてしまう。それでは人間というものの本当の命を活かす・成長させるという生き方はできません。肉体が成長するだけじゃなくて、意識も成長する、精神も成長する、生きていればだんだんだんだん知識が増えていく…成長というのは自然に命が求め、また獲得していくものであります。それを自覚化していくことによって成長意欲が出てくる。人間は死ぬまで成長し続ける必要がある。死ぬまで人間としてもっともっと成長したいと思って仕事をし、そういう意欲を持って生きることが人間としての生き方における本物という“しるし”であります。**

**成長意欲をなくした時、人間は傲慢さが出てきて、人を批判するようになってしまって人から学ぶことが出来なくなってしまい、人間として堕落してしまう。もっともっと成長したいと、そういう気持ちがあることによって、人間は出会いを活かしながら素晴らしい人間関係を作って、そして体験を積み重ねて、そしていろんな気づきを積み重ねて、成長していくことができる。成長意欲がないと積み重ねという成長ができないんですね。**

**五番目に書いてあることですが、「人間としての成長意欲」と書いてありますけど、人間は不完全でありながらも完全なるものを意識できる。不完全であることで、不完全でいいんだと思っておってはならない。不完全でありながらも完全なるものを目指す。完璧なのを目指す。だけども絶対に完璧・完全はない。謙虚さを持ちながらも、成長することが人間とっては大事なんだ。自分自身は、自覚してなくても命は日々成長し続けているんだ。それを自覚的にすることは、人間として生きるという事なんだ。日々体験は積み重ねられていく、日々いろんな人からいろんなことを学びながら人間は成長して、それをどう活かしていくかってことが成長意欲というものに関わってくる重要な課題であります。とにかく、もっともっと人間として成長したいという、そういう気持ちを持ち続ける必要がある。**

**人間には人格というものがあって、基本的に人間の格を作らなければなりません。だけども人間として成長していくためには、さらに人格を磨くという、そういうことも考えなければなりません。人格を磨くとはどういうことなのかと言ったら、人格には高さ・深さ・大きさというものがあります。人格の高さを求めるには、別の言葉で言ったら高貴なる精神と言って、高く尊い精神、高貴なる精神。そういう気持ちで仕事をしていかなきゃならない。また人格には深さがある。「もっともっと深い人間になりたい」「もっともっと深いことを言うことができる人間なりたい」そういう気持ちで我々は仕事をし、お客さん対応をしていかなきゃならない。人間には大きさがある、人格には大きさがある。もっと人格の大きな人間になりたい。器が大きい、度量が大きい、包容力がある、統率力がある…そういう大きさを求めながら我々は組織の中で仕事をしていかなければなりません。組織の中で人格の高さ・深さ・大きさを求めていくという仕事の仕方をすることによって、具体的に成長を実現していくことになるわけであります。**

**謙虚さだけではなくて、二番目に本物の人間に求めるのは成長意欲。もっともっと人間として成長したい。人間における成長というのは、人間性だけではなくて、能力の成長も考えなければならない。日々技術は進歩し、日々新しい知識が生まれてきます。建設業界の日進月歩の発展・変化・成長というものを、いろんな情報を獲得することによってつかんでいって、そして時代の要請に遅れないような努力を積み重ねていかないと、会社としても本当の消費者の要望に応えて、消費者を満足させることはできません。そういう意味でも人間としてもっともっと成長したいという、能力における成長と人間性における成長、この両方からの成長というものを考えながら仕事をする事が大事な姿勢であります。**

**次は六番目ですけど、「人の役に立つことを喜びとする感性」と書いてありますけど、社会の中で生きる人間として本物になるためにはどうしたらいいのか。社会の中で生きるという事は、具体的にプロとして仕事を持って生きる事になっていくわけなんですけども。社会というものをお互い役に立ち合うという関係性で社会というものは結ばれておるわけであります。だから基本的に社会の中で生きるためには、人の役に立つ人間になりたい。人に必要とされる人間なりたい。という気持ちが必要である。だから人の役に立つことを喜びとする感性というものを我々は持つ必要がある。人の役に立つことを喜びとする感性の事を愛と言うんですね。人の役に立って相手が喜んでくれたら自分も嬉しいという、そういう心情が社会における愛の精神であります。**

**また社会というのは、自分の価値は他人が決定するという厳しい原則に基づいて動いております。自分がどんなに素晴らしい力を持っていても、他人からそれが評価されなければ一文の価値もない人間だ。評価されることによって社会の中で生きるという事が出来る…これが現実なんですよね。自分の価値は他人が決定する。他人から評価されなかったら一文の価値もない。だから、現実の会社の中では「こんなに頑張ってんのになんで上司は認めてくれないんだ」と言って、上司は自分の能力を評価しないし、自分の仕事を評価しないという事に不満を感じるという、そういう人も多々いると思うんですけど。孔子が中国の政治に対した言葉で、「人の己を知らざるを憂えず、人を知らざるを憂うなり」というものがあります。**

**他人が自分のことを認めてくれないと言って嘆いているようではダメ。良くする事なきを憂う。すなわち、認めるも認めないもない、認めざるを得ないという力を自分が持つ努力をしていないことが問題なんだと。社会の中で生きて行こうと思ったら認めてくれないって言ってんじゃなくって認めるも認めないもない、認めざるを得ないというところまでいかないと社会の中では本当に生き残って生きていけないぞということなのです。**

**「あいつはスゴイやつだ」と言ってもらえるところまで行っていないことに問題があるのであって、認めてくれないと嘆いているという事は、まだ相手が認めるところまで自分が行っていないということの証明。そんなことじゃなかったら社会は生きていけない、強い人間になれないということを言っておるわけであります。「人の己を知らざるを憂えず、人を知らざるを憂うなり」**

**とにかく、現実の社会というのは、自分の価値は他人が決定するという原則で成り立っております。だからこそ人の役に立つ人間になることを目標にしなければならないし、人に必要とされる人間になることを目標にしなければなりません。**

**そして、人の役に立つことを喜びとする感性を持つ必要があります。人の役に立つことを喜びとするという感性のことを愛という風に言うわけであります。だから本当に人間が人間として本物と言われるためには、謙虚さと成長意欲と愛というこの三つの力が求められる。人格とは何なのか、人間の格があるとは一体どういうことなのかと言ったら、謙虚さと成長意欲と愛があることを持って人格というのである。それが犬猫ではないぞと言うことができる具体的な内容なんですよね。この三つのことが人間という命の形というものを作る原理であるという風に我々は考えなければなりません。何故にこういう人間という命の形が出来上がっておるのか。その人間という命の形に表現されている内容とは一体何なのか？ と考えていくと、そこに謙虚さと成長意欲と愛という三つの原理が浮かび上がってきます。三つの原理を持って人格と言うんですね。それはさらに実践的、具体的に申し上げると、仕事において成功しようと思ったら、謙虚さと成長意欲と愛という人間の格というものの基本原理がなかったら、人間は仕事において成功し、また会社を存続させて利益を上げ続けるという事は出来ません。謙虚さと成長意欲と愛があることによってその人は社会に認められ、会社も社会から求められて発展して行くことができます。仕事のおいて成功し、社会の中で認められる人間になるためにも、基本原理である謙虚さを養っていかなければならないし、成長意欲を無くさないように考えていかなきゃならないし、また人間の愛を我々は忘れないようにしなきゃならない。愛というのは心遣い、思いやりですね。**

**「職業」というように我々が言っているものは、具体的にどういう活動なのか。職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになる活動のことを職業と言います。職業というのは、全て人のために何かをすることによってお金を得る、という構造で成り立っております。職業というのは自分のために何かをしているんじゃない、職業はまず人のために何かをして、人に喜んでもらったら感謝のしるしにお金が入ってくる…そういう構造で回ってるんですよね。そしてお金が入ってくることによって自分も幸せになれる。職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになる活動である。社会的存在として人間が生きてくためには、人を幸せにする力を作っていかないと自分も幸せになれない。まず自分が幸せになると思ったら、必ず人を犠牲にする。人を踏み台にする。これでは本当の幸せにはなれないですね。**

**全ての職業は愛の実践だという風に言われます。すべての職業は愛の実践だ。人の役に立つということが基本的な仕事の原理、在り方であります。だから仕事をする人は、皆どういう気持ちを持っていなくてはならんかと言ったら、職業・仕事というのは人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った、本物の人間を作っていくための活動なんだという風に職業を理解しなければなりません。職業とは人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った、本物の人間に自分を成長させるための活動なんだ。そのように仕事・職業を理解しなければなりません。**

**なぜか？ まず人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしていたのでは、会社は潰れます。その人に注文は来ません。まずは人に喜んでもらえるような仕事の仕方をしなくてはなりません。そのためには人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を養うことが求められてくるわけであります。どうしたら人に喜んでもらえるのかということは、実際問題仕事をしてみないとわからない。机上の空論で「こうしたら喜んでもらえるだろう」と思っていても、実際にはそれはありがた迷惑だと言われたり、「そんなことでは何も嬉しくない」と言われたりなんかする。よく商店なんかでサービス品をくれる時があるんですけど、「これはサービスです」とタダで貰えるものは、貰ってもあまりありがたくないものが多いんですよね。要らないからくれるという、そんな感じのものが多い。それでは本当のサービスにはならない。本当に相手に喜んでもらえるものをあげる…そういうことをしなかったら、サービスの効果がないわけですよね。常に本当に人に喜んでもらえるかどうかってことは、やってみないとわからんというところがたくさんあります。自分の身勝手な自己中心的な解釈や思いでは、本当に人に喜んでもらえる仕事の仕方とはなんなのかということを知ることはできない。実際問題、行動して実践して、本当に人に喜んでもらったという結果が出て、初めて分かるというものが、本当の愛の実践と言われる愛の在り方、確かめ方であります。仕事を通して自分自身を成長させていくことを考えて、単に仕事というのは金儲けではない、利益を上げることではない…まずは人に喜んでもらえるということが仕事の根本精神。これはもう日々仕事をしてらっしゃったら嫌というほどわかってることなんですけども。だけども、それがなかなか現実に本当に相手に喜んでもらえてるかどうか、そのことは本当に実現できているかどうかは、非常に難しいところがあります。そういう意味で我々は、実践しながら自分のやっていることが、本当にお客さんに求められていることなのか、喜んでもらっていることなのかを常に確認しながら仕事をしているということが大切な愛の実践という風に言うことができます。**

**心遣いという風に申しますけど、もっと真剣に考えてみなきゃならんことは、今社会で生きている人間は皆心が欲しいと思ってるんですよね。理屈じゃない心が欲しいと思っている。だけども、実際にあげているものは、ほとんど皆理性なんですよね。理性でああだこうだと説明して言い訳をして、そして相手にわかってもらおうという努力をしている場合が多いです。親子関係も理屈だ、夫婦関係も理屈だ、学校に行っても理屈だ、会社におっても理屈だ。理屈が通ればすべてはうまくいくんだという理性的対応が非常に多いです。だけども、今の時代はもうすでに理屈だけでは満足しない。理屈だけでは納得しないような時代になってきて、本当に相手の心を満足させる、相手の心を満たすという、そういう思いで仕事をしているかどうかが問われているわけですね。皆心が欲しいんだ。そのためには心が欲しいと思っているのだから、心をあげなければ相手の心は満たされません。そこでその心が欲しいとは何が欲しいのかを知らないと、また相手の心を満たすということがどういう風なことをすることなのかも分かりません。心が欲しいという叫びの中に何があるのかと考えてみますと、大きく分けて七つの叫びがその中に含まれております。**

**心が欲しいとは何が欲しいのか、**

**一つは認めてもらいたいんだ。**

**それから分かってもらいたいんだ。**

**褒めてもらいたいんだ。**

**好きになってもらいたいんだ。**

**信じてもらいたいんだ。**

**許してもらいたいんだ。**

**そして、あまり急がないで待ってもらいたいんだ。**

**この七つの叫びが心が欲しいという叫びの中に現実に存在するものであります。**

**子どもも七つの欲求を持っている。皆認めてもらいたい。わかってもらいたい。そして褒めてもらいたい。好きになってもらいたい。信じてもらいたい。許してもらいたい。あまり急がさずに待ってもらいたい。**

**親も子どもから認めてもらいたいんだ。親も子どもから分かってもらいたいんだ。親も子どもから褒めてもらいたいんだ。そして親も子どもから好きになってもらいたいんだ。そして親も子どもから信じてもらいたいんだ。そして親も許してもらいたいんだ。そしてあまり急がさずに待ってもらいたい。そういう気持ちが親にもあるということを意識しながら子どもは親に対さなければならない。会社においては上司も部下から認めてもらいたい。分かってもらいたい。褒めてもらいたい。好きになってもらいたい。信じてもらいたい。許してもらいたい。待ってもらいたい…そういう気持ちを持っておるんだ。部下もそうだ、社長さんもそうだ、全ての人間は七つの欲求を抱えながら心が欲しいと叫んでいるんですね。そのことがわかったならば、心をあげるとは何をあげることなのかということがはっきりしてくる。心をあげるとは、まず認めてあげる努力をすることだ。そしてわかってあげる努力をすることだ。そして褒めてあげる努力をすることだ。好きになってあげる努力をすることだ。信じてあげる努力をすることだ。許してあげる努力をすることだ。そして待ってあげる努力をすることだ。これが心をあげるということなんですね。**

**なぜ努力、努力と申し上げるのかと言ったら、努力なしには心は伝わらない。愛は相手にわかってもらえない。愛の実践における原理は努力です。相手のために努力する気持ちがなくなったら愛は失せたんだ。相手のために努力する気持ちが少しでも残っていたら、まだ愛はある。相手が自分のことをどの程度愛してくれているかを知ろうと思ったら、相手が自分のためにどの程度までの自己犠牲的努力を払ってくれるかを見れば、相手が自分のことをどの程度好きなのかが分かる。また自分が相手のことをどの程度愛しているかを知ろうと思ったら、自分は相手のためにどこまでの自己犠牲的努力が払えるかを見れば、自分が相手のことをどの程度大事に愛しているのかがわかる。努力なしには愛は存在しない。努力なしには愛を証明できない。本当に心を相手にあげようと思ったら、我々は行動と言葉、実践によって、その心を表現しなければならない。思いやりとは心の中で思っているだけじゃ思いやりじゃない。思いやりとは思いを行動に出すことが思いやるという言葉の意味。思いやりとは思いを行動に出すことだ。心遣いとは心を行動に出すこと。そのことによって自分の心は相手の心に伝わる。相手の命に受け入れられていく。心はあっても実践と行動と言葉がなければ、相手はこちらの心がわからないですね、よく陰徳を積むと言ってそれも大事かもしれませんけど、もっと現実に大事なのは、具体的に自分の気持ちを行動や言葉に出して、相手の目の前で見せるという実践が一番大切な人間の生き方であります。**

**まさにこれでもかと思うぐらい自分の気持ちを行動に、言葉に出して相手の前でやってみせる…そのことによって初めて自分の心は相手にわかってもらえる。行動なしには愛の実践、実証はできない。心を知るにおいて心をあげるということ事をすることによって、心のつながり・心の結びつき・心の通い合い・心の絆というものが作られていくことになるわけであります。これが具体的に愛の実践と言うことができる現実的なやり方です。今心が欲しいんだから心あげることは愛だ。だけども、現実の業務から考えると「そんな認めてあげて、わかってあげて褒めてあげてるばかりじゃ…」や「そんなの生ぬるいことではできへんぞ」と考えている人も随分といらっしゃると思うんですね。それでもまず人間は、叱られたくない・知られたくない・注意されたくない…そういう気持ちがあって、できることなら褒めてもらいたいという心情が根底にあります。**

**それで叱るということをする場合でも、まずは相手の努力を認めてあげて、それから足らざるところを注意する、叱るという順序が非常に大事。まず叱ると相手はむかつく、反感を買う。「なんで認めてくれないんだ」ということになってくる。ですから、まずは相手の努力、やったことを認めてあげて、そしてそれから注意をするという。そういう心遣いが大事なんですよね。**

**感性論哲学ではいかなる正義の味方だと言えども、人の心に傷を与えるような、人を不快にするような言い方で正しさが使用されるならば、その正しさは悪だということを申し上げております。いかなる正義、いかなる真理、いかなる正しさと言えども、人の心を害するような仕方でその正義が正しさを語るならば、その正義は悪だ。だから、正しいことを言う場合でも相手の気持ちを害しない、相手の心に傷をつけないような、そういう言葉でまたそういう目つきや表情や態度で、自分が正しいと思うことを相手にわかってもらう努力をしなければならない。それが心遣いであって、「正しいことを言っているのだから、相手がそれをどう受け取ろうと構わない。俺は知らん」ということでは、これは理性の対応の仕方であります。心があるならば、相手の心に傷をつけないような仕方で、自分の言うことを相手にわかってもらおうという、そういう心遣いをして、努力をして、言うことをする必要がある。そのためには言葉だけじゃなくて、目も表情も態度もちゃんと相手に分かってもらいたいというような、そういう願いや祈りを込めて話すということが大事になってきます。ということはやはり、そこには愛。叱る場合でも注意する場合でも目には愛がなければならないと言うことができる。叱っても心の絆が断ち切られない、叱っても心の絆は断ち切られない…そういう注意の仕方、叱り方というものを感性では求めていかなくてはならない。**

**これは有名な話ですけれども、以前「スクールウォーズ」という有名なドラマがありました。「スクールウォーズ」というのは日本ラグビー界の雄、大選手と言われた山口良治という選手が、京都の荒れ果てた学校である京都伏見工業を立て直すために体育教師として赴任する。ラグビーを通してその学校を立て直そうとするんですね。だけども、その学校は荒れ果てた状態で、学校の廊下をバイクでぶっ飛ばすような学生がいたり、本当に授業が全然できないという状態でした。そういうところにラグビー部を作って、それをきっかけにして学校を立て直そうと思ったんですね。皆非行に走り、不良と言われてるような子どもたちですから、なかなか言うこと聞かない。で、ちゃんと練習してくれない。そこで対外試合をさせるんですが、結果として128対0で負ける。ちょっと数字は確かじゃないんですが、大きな差で負ける。しかも0で負ける。128対0で負ける、そういう状態だった。そういう結果を体験させて、「お前ら悔しくないんか？ お前らも高校生だが、相手も同じ高校生、どこに128対0という差があるのか。悔しくないのか？おかしいじゃないか？」と言って、子どもたちにに目覚めを求めるんですね。だけども、なかなかそんなことぐらいでは目覚めない、言うことを聞かない。そこで、「今から気合を入れる！」と言って、皆を整列させて一人ひとりに鉄拳をくらわすという。**

**そのドラマの中では山口良治という本名ではなく、滝沢先生という名前で演じておられましたけど、先生は一人ひとりに鉄拳、げんこつをくらわす。ぶん殴られると不良の学生だから「何を！」と先生に向かっていく気持ちで立ち上がってくる。先生の胸ぐらを殴ろうと思った瞬間に先生の顔を見たら、先生の目から涙…その目から流れる涙を見た瞬間に、その学生は手を離して先生の前に気をつけをして、「ありがとうございました」と言ったんですよね。どうしてだと思いますか？ 「涙を流して殴ってくれた大人は初めてや。この人になら付いていける。この人なら信頼できる」と、そういう思いがわっとその子どもから湧いてきたんですね。そして一人ひとりぶん殴って、皆ぶっ倒れる。立ち上がってくる時に皆その先生の顔を見つめながら、目から溢れる涙を見つめながら、「ありがとうございました」と言うんですよね。全員がそういう状態でようやく先生の思いを感じて、そして真剣に練習することになって、わずか3年で高校ラグビー界の甲子園と言われる“花園”で全国優勝、全国制覇をするという、そういう奇跡の勝利をあげることができた。その元になっているのが、学生を殴る先生の目に涙があった。先生は殴りながらも、憎くて殴っているのではない。本当になんとか立ち直って欲しいという祈りと願いを込めて、その愛を学生は感じて、そしてこんな大人は初めてやと、そして先生に付いていくという決意をしたわけであります。**

**本当にそういう意味では、人間関係において大事なものは何なのか？ やっぱりどういう行為をする場合でも、その目に愛があるかどうかということが問われるんじゃないかと思うんですね。愛のまなざしを持って言葉を発し、愛のまなざしを持って注意をし、叱ったりする。そこに相手は理屈抜きにその人の言うことを受け入れようとするかどうかが決まってくることになるわけであります。もっと我々は仕事の現場において、目に愛があるかということを自分に問わなければなりません。部下に対しても取引先、お客さんに対する場合でも目に愛があるかどうか。表情に態度に愛があるかどうか。自分に問うて、目を鍛え、表情を鍛え、態度を鍛え、仕事を通して自分を成長させていくという生き方を考えていかなければならない。それが理屈じゃない、心を大事にする、感性を大事にする仕事の仕方というものであります。**

**近代は理屈が通れば、すべてうまくいくという理性主体の仕事の仕方をやってきましたけど、もう今の時代は人間の本質が理性じゃない心だ、と言われる時代になってきたのですから、人間の求めるものは全然違ってきています。理屈だけではもう人は動かない、納得しないという、そういう現実を我々は意識しながら、いろんなことをしていかなければなりません。心遣いや思いやりを前面に出さなければならない。例え叱る場合でも、ぶん殴る場合でも、その目や表情や態度に愛があるかどうかを問わなければならない。**

**時代の変化というものを我々は読み取りながら、いろいろな仕事をしていく必要があると思います。我々がプロとして仕事をしていく上で、本物と言われる人間になろうと思ったのならば、最終的にどういう自覚が大事なのか。人間が本物になるということのために大事な条件が二つあります。**

**人間の本質や人間の実態、本当の姿というものに触れるという体験が欠くことのできない条件であり、また社会の本質、社会の実態に触れるという体験が本物になるためには求められるんですね。人間が本物になるためには人間と社会の本質・実態に触れるということが欠くことのできない重要な原理であります。**

**では人間が社会の本質・実態に触れるとはどういうことなのかと言ったら、人間というものがどれほど醜いものなのか、人間というものがどれほど恐ろしいものなのか、人間というものがどれほど怖いものなのか。社会がどれほど醜く、恐ろしいものなのか、怖いものなのか。その人間と社会の本当の恐ろしさと本当の醜さと本当の素晴らしさに命が触れる体験を持って、初めて人間の命は磨かれて、鍛えられて、そして世界を生きる、生き抜いていく力を実力として獲得することになります。**

**ではどうすれば、我々は人間の恐ろしさ、人間の醜さ、人間の素晴らしさ、社会の恐ろしさ、怖さ、醜さに命が触れる体験を持つことができるのか。なぜこの体験が話題になるかと言ったら、人間の実力というものは、命に痛みを感じる体験なしには実力はできません。命に痛みを感じない体験では命は鍛えられないんですね。実力というのは肉体に痛みを感じる、命に痛みを感じるということが実力が作られていく基本原理です。だからアスリートの方々が成長するということは、今自分の持っている力の限界に挑戦することであって、辛い苦しい…本当に死ぬほどの覚悟を持って、今の自分の力の限界に挑戦していく。本当に命に痛みを感じる体験を持って、初めて記録が伸びる、成長するということがあるわけですよね。**

**あの羽生結弦さんが、以前世界最高記録を出した時にインタビューで、「本当に死ぬほどの思いを持って努力しました」とおっしゃってました。あれほどの天才でもやっぱり力を伸ばしていくためには、死ぬほどの努力というものが求められてくるわけであります。そういう命に痛みを感じる努力をもって初めて実力が作られていく。それを一般的な仕事において考えるならば、我々は仕事を通して、人間の恐ろしさ、社会の恐ろさしさ、人間の醜さ、社会の醜さ、怖さを体験することによって、初めて命は磨かれて、強くなって世界を生き抜いていくという力を身につけるということができるわけであります。**

**本当にそういう人間と社会の恐ろしさ、醜さ、素晴らしさというものを体験するためにはどうしたらいいのか。そのためには弱肉強食、利害、打算が支配する社会、世界の中で我々は生活をかけ、命をかけて働く。しかもプロとしての仕事を持って。そうして、ようやく我々は本当の社会の恐ろしさに出会う。社会の醜さに出会う。また社会の怖さまた社会の素晴らしさに出会う体験を持つことができる。そうすることによって我々の命は鍛えられ、そして醜い・怖い・恐ろしい社会も生き抜いていく実力が養われていくことになるわけであります。プロとしての仕事を持って、命の痛みを感じる体験を積み重ねていくことによって、初めて我々は人間として実力を伴った成長を遂げていくことができる。**

**そういうことを考えれば、仕事あるいは職場というのは、まさに自分自身を本物の人間に磨き上げる鍛えあげる道場だということができるのではないかと思います。仕事というのは一瞬一瞬が真剣勝負なんですよね。その真剣さが命を磨いてくれる。一瞬たりとも気を抜いた仕事の仕方をしたのでは、すぐそれは相手に見抜かれてしまう。決して人間に完全性を求めることではなくて、「相手が納得してないなー。なんか嫌だなと思ってるな」と思ったら、すぐにそれに反応して「あ、ごめんごめん。許してくださいね」と言って、自分の足らざるところを詫びる…それが不完全な人間における真剣な、気を抜かない生き方。不完全だからいろいろ失敗もする。失敗だとわかったら相手が満足していないとわかったら、すぐには詫びて、相手に満足してもらえるような対応をまたやってみる。そういう試行錯誤が不完全な人間の努力、真剣さであります。その真剣さを見せることによって初めて相手は、自分の気に入るような状態にならなくても、その努力を認めてくれて、「自分のことを考えてよく頑張ってくれてありがたい」と思って、そこに愛を感じて相手は納得してくれる、許してくれる…ということになってくるわけですね。そういう不完全な人間における本当に相手を納得させる努力の仕方というものを我々は真剣に考えていかないといけないと思います。失敗したらいかんのではない、失敗したときこそが本当の愛を本当の真剣さを相手にわかってもらうチャンスだと考えて、相手の心を満たす対応を考えていかなければなりません。**

**とにかく本物というのは、完全性を目指すのではない。不完全を生きるということが人間として本物の在り方である。不完全を生きるというのは、失敗したらいかんのではない。失敗したときこそ、その対応が大事で、そのことによってかえって相手にこちらの思いを本当にわかってもらえるチャンスなんですね。決して失敗を恐れてはならない。失敗をしながらそのことをきっかけにして相手に本当のこちらの気持ちはわかってもらうために謝って、また相手に納得してもらえるような方法を考えてやってみる。それが相手に愛を感じてもらう方法なんですよね。よく仕事の現場では感謝が大事だとほとんどの会社で皆感謝感謝と言っていますが、感謝という心も大事なんですけど、感謝という心にはまだまだ自分が良く思われたいという善人根性がちらつく。感謝はまだ浅いんですね。本当に不完全な人間が、人間としての真実の在り方、心というものを相手に伝える、わかってもらう方法は、唯一謝罪、謝る。「ごめんね、許してね」と詫びる心に不完全な人間の本当の真実がある。本当の愛がある。と言わなければならない。感謝は浅い。「申し訳なかった」と詫びるところに不完全な人間の本当の愛の真実がある。不完全であるがゆえに「俺は子どもにも多々謝らなきゃならんところがある」。経営者は社員に謝らなければならんことがたくさんある。先生なら学生に謝らなければならんことがたくさんある。その至らなさに気づいたとき、相手は納得してくれて、かえって謝るがゆえに尊敬してくれるという、そういうことが生じるわけであります。**

**あの有名な仏像、弥勒菩薩という仏さんがありますけど、あの弥勒菩薩の表情をドイツの有名な哲学者であったカール・ヤスパースが日本に来て、弥勒菩薩を眺めたときに言った言葉が、「この仏様の表情は人間として到達しうる最高の表情である。だけども、この尊い、この美しい表情になるためには、相当な深い罪を犯して、しかもその罪を深く反省して、その罪を償うおうとする気持ちになった人間しか、こういう表情にはなれない」と。本当の本物の人間は自分の至らなさを詫びるということによって、人間として最高の姿に到達するんだ。ということをカール・ヤスパースは言いました。そういう精神が日本の仏教の中にもありまして、「善人なおもって往生を遂ぐ いわんや悪人をや」。「俺は何も悪いことなんかしてないぞ」という浅はかな人間的自覚の疎い善人根性を持った人間でも成仏できるんだと。「俺は悪いことをしてしまった、本当に申し訳ない」そういう気持ちを持った悪人が、どうして成仏できないはずがあろうか。悪人こそ真っ先に仏は救われるんだと。俺は悪いことをしてないと思っている人間でも救われるんだから、俺は大変なことをしてしまって申し訳ないという、そういう心を持った本物の人間がどうして救われないことがあろうか。これが仏教の最も深い悟りの境地なんですよね。それほど人間にとっては「申し訳なかった」というそういう罪の意識というか、自分を振り返って反省して相手に詫びるという気持ちが人間にとって美しい心であり、またそこに人間が本当に人から尊敬されることになる大きな要因がある。そう我々は考えて、もっともっと我々は素直に自分の至らなさを詫びるという精神を客にも取引先にも実現し、実践していく努力が大事であります。**

**そのことによって企業はついつい「失敗なんかしてない。自分たちは何もしていない。問題はないんだ」と言い逃れをする企業が多いんですけど、そうではなく、本当に至らなさがいっぱいあると認めることによって、企業の風土、社風が高貴なる精神に到達することができる。いろんな企業には問題を隠す、隠蔽するという体質が色濃く残っています。問題を明らかにしない、なかなか詫びない。そこに詫びる、至らなさを自覚して詫びるという美しい精神風土を作っていったならば、企業の体質は本当に愛に満ちた輝きを持つことができることになるんじゃないかなという風に感性論哲学では考えております。**

**感謝は浅い。謝罪こそ本当の不完全な人間の美しい心だ。そこに本当に人の心を満たすという好意があるんだということも考えてみてもらえたら嬉しいと思います。人間としてプロとして本物とはなんなのかという話をさせていただきました。どうぞ参考にして素晴らしい職場を作ってください。どうもありがとうございました 。**

**15年間ありがとうございました。年間4回×15年で60回×3時間で180時間…ビデオにも完全に収まっておりますので、本当にありがとうございました。来年からは12～13名の役員に向けた「感性経営の実践」にご指導のほどよろしくお願いいたします。長年ありがとうございました。**

**アサヒグローバルさんで15年ほどお話をさせてもらいましたが、その都度真剣な気持ちで関わらせていただきました。お話をさせていただく度に自分が成長させていただけたことを心からうれしく思い、感謝しております。本当に長い間お世話になりました。**

**先生のこの180時間のビデオは「https://yoshimura-shifu.com」にすべて入っておりますので、見たいときはいつでも見られます。一部はもしかすると課題にいたします。それと新しい社是、皆さん、まだ知っているか知らないか知りませんが、「幸せな会社をつくろう」。来年からはそうします。先生からいろいろな教えてもらったことを実行すると、会社は潰れるかも知りません。心が欲しい…理屈で考えれば、そんな会社潰れますよ（笑）。なかなか勇気を持って実行できなかったのですが、一か八かやってみる！ なぜならば今年は40周年…私の経営にひと区切りをつけ、白紙に戻す。新しい経営でいきたい。人事などいろいろとありますが、感性経営の10原則を中心にまず上から率先垂範で勉強して、良い会社になれば良いなと。もしかしたら失敗するかも…（笑）。その危険を感じながら努力をしたいなと思っています。先生、どうも長い間ありがとうございました。**